

第三章 西伯利鐵道調査時代(下)

一、 恩師ダイヤヤー氏を訪ふ

我が國は開港通商を米國に軍事並びに立法行政に於ける統制を獨佛に、いづれも其の指導を仰ぎ、其の範を取りたるもの最も多しとせば英國は實に我が國工業建設の最初の基礎を寄與せし先進國として國民は其の厚誼を永久に紀念せねばならない。

明治初年の回顧

願れば、明治五年、岩倉大使一行が初めて渡英して、工業教育上の施設を行ふべき根本調査に着手し、之が援助を英國の識者に求むるや、倫敦に於けるマセソン商會のマセソン氏は、大使の隨行員たる伊藤博文と舊知の關係あるより、快く其の請を容れて協力の勞を惜まず、氏は友人たる工學界の大家ゴルドン氏に策り、ゴルドン氏は又斯界有數の學者ドクトル、ランキン氏と協議し、遂にダイヤヤー氏を舉げて我が國に於ける工學教育の組織を確立せむことを囑し、少壯俊秀のダイヤヤー氏は先輩の意を諒として祖國を後に千里を遠しとせずして來朝し、此の大任を負擔して、我

ダイヤ
氏健在矣

が國民を導くに獻身的努力を以つてし、遂に工部大學創立の事業を完成して、歸國せるは既に前編に叙述した。ダイヤ氏の名は實に日本文明の一大恩人として、我が帝國百世の後に傳へられねばならないのである。

あゝダイヤ氏健在矣。そは如何に、直接其の教へを受けし門下生にとりて、大なる歡喜であらう。況んや、我が田邊博士は、學術上に於いて、將た其の人格の上に於いて、最も善く氏に知られ、又最も善く氏を識りし第一人者なるに於いてをや。博士が歐羅巴歴遊の後海を航して英國に渡つたのは、一別以來、絶えて久しき恩師の慈顏に接せむことを目的とせしや、謂ふまでもない。博士が歸朝後にものせし「ダイヤ先生を訪ふの一篇を讀めば當年師弟交驩の狀は躍如として行文の間に現はれ、人をして其の應酬の純真にして、師弟の情誼の濃かなるに、服せしめずんば止まぬのである。其の文にいふ。

純真なる
師弟の情
誼

去る三十三年八月、元工部大學校都檢たりしダイヤ先生を、蘇國グラスゴー市外ハイボロテレスの邸宅に訪ふ。元これ閑寂なる一小部落に過ぎざりしもの、今や人家稠密、數年前にグラスゴーの市に編入せられた先生の邸は、地下室附の二階建造にして、右方にベ、ウインドあり、後に古木舊苔に富める庭園あり。翠濕窓紗を襲ひ、禽語樹杪にひゞき、晝は日光麗かに

吹く風自ら煦々たり。先生はこの優悠にして、自然に富める庭園の主人公として今や北蘇の教育事業に盡瘁し、靜かに瞑想し、靜かに讀書し、行往澹々にして適從意の如し。余の先生を訪問したるさき、先づ出でられたるは令闈なりき。余の顔を見るやさも待設けたるさまにて、詞優しう、『日本からも度々お手紙を頂きましたが、今度西伯利亞を通つて來なされるこの事で、少からず心配して居たのであります』が、其の後巴里からのお手紙で安心し、近く倫敦からの御手紙で、多分唯今あたりお出の事ご待つて居たのであります』と云はるゝに、余は一しほ思餘りてなつかしく感じぬ。先生及び夫人と相別れてより早や二十年に近し、先生の日本へ來られたるは千八百七十四年、生國へ歸られたるは千八百八十二年(明治十五年)我が國に在住するゝ、ここ八年然も相見ざるここ久しうして先生を想ふの情益密を加ふ。

余の聲を聞き付けて先生出で來られぬ、『其處はホールだ、まづ此處へ――』と云はるゝまゝに室内に導かれぬ。先生の日本を出發されしときは、相應の年齒と覺えた。其温手に接せざる十有八年、先生今や白髪を載きたる老人ならんとは、余の念頭に絶えざることなりき。今や先生を見仰ぐれば、豈斗らんや其の若き容貌顔色、つや／＼しく活氣逼るが如く、實に以外の感に打たれざるを得ざりき。

先づ先生の云はるゝに、『君が來らるゝのを先日來待つて居た、君の名は英國の新聞紙等でも折々見て居るが、又能く成功して居ることも、知つて悦んで居る』と。溢美敢えて當らずも、

先生が余の如き者をも、絶えず注意して、其の一動一靜に心勞せらるゝは、余の深く感謝せざるべからざる所である。先生は更に『外の人達は何うして居るか』と問はるゝに、余は左の如く、『先生に教育を授かつた人々は、今や其の習つた専門の學理、又其の専門の技術に因つて各々成功して居ります。夫等の人々は皆齊しく先生の恩恵に孤負せざらんここに努めて居ります……』と答へたれば、先生非常に喜び、『それは諸君の勉勵にも依るこゝであるが、一は國の發達に伴ふ個人の進歩である。聞く所によれば日本は其の後非常に發達して居るさうで、寔に喜ばしい事である。東洋の天地には今後日本人の活動を容るゝの部域が頗る廣いのであるから君等も手に睡して起つてこの活動圏内の主動者ならねばならぬ』と云いてホホーと打笑まれ然も胸中湧くが如きの喜びは、先生の眉目に浮び出で恍乎として余の顔を凝視せらるゝ、こゝ多時なりき。

先生は語を續けて云はるゝに、『お別れの時に贈られた物品は今此に持つて居る。私はそれを諸君の記念として毎日愛重して居る』と。其の状宛も懷舊の情に勝へざるが如し。既にして鬨を排して來るは夫人にして、食事の用意整ひたれば、この事にて即時先生に連れられて食堂に入りぬ。

食堂は先生が家庭に於る楽しみのも多きこゝろで亦深き注意をせらるゝ處、卓を圍みて威嚴ある主人も温良なる夫人も、子供も皆來りて一室に會し、齊しく熙々霽々裏の人となる。

先生四子あり、長をシャーレスミ云ふ。日本に居りし頃は未だ小兒なりしも、長じて今やグラスゴー大學を卒業せり。次をロベルドミ云ひ、其の次をゼームスミ云ひ、先生が日本に居られたる頃この兒は猶乳を離れて間のなき事にて、一家はベビーさんミ呼びて、最も深く鐘愛せられありしに、六呎三吋の先生に似て今や身長まさに六呎を抜くばかりなりき。他に愛嬢メリあり、其のやさしき顔ばせの能く母に似通ひ、温雅にして優長なる氣分も父の心ざまを傳へたり。ミ覺ゆ。この怡樂に充てる食堂に列したる余は、實に一幅の幀畫エナメルに身を置くが如き感ありき。余の大學にありし日も、先生は常に家を齊ふるの方法順序を話されたりき。余は其の教に基き、余の家庭を作り、確に成功したり。思ふは、是も亦先生の賜にして今や久しく見ざりし其の有様を見るを得たり。これぞ英國ホームの模範なる。

傍らにありし夫人は余の顔を見つめて、『貴君は婚禮をなすつて、お兒達までお出來のやうに聞きましたか？』云はるゝに、余は『お蔭でパーさんになりました。男の兒が三人もあるのです』答へぬ。夫より猶日本の現状より支那朝鮮の事情に及んで種々語合ひつゝ、漸く食事を済ましぬ。

去つて書齋に入れば、先生はアームチェアーに腰を掛けられ、『君は非常に若く見える。定めて健康であります。……それは結構です』と仰せらるゝに、余は『身體は幸に健康です、公務の事で無理を致しますことがありますが、過度な愉快は取りません』と云へば、『それは何より』と云

はる。過○度○な○る○愉○快○を○取○る○勿○れ○こ○は○先○生○の○格○言○な○り○。余○は○こ○の○格○言○を○最○も○價○高○き○もの○と○し○て、
常○に○余○の○平○生○を○規○律○す○る○規○箴○と○な○せ○り○。

余は先づ『先生は余を若く見ゆる』と仰せらるれど、余は先生の若く見え給へるには實に驚きたり』と云へば、先生の返辭も亦意外、余は若く見ゆるに非ず、實際に若きなり。余が年齒は五十を僅に出たるのみ』と先生の日本に留るこゝ八年、日本を去られてより實に十有八年、今に於いて年齒五十あまりとすれば始めて我國に來られし時は、二十餘りの青年にて、歸國せられし時も、三十餘りの人なりしなり。先生の日本に於て建られたる工學教育の基礎は堅固なり。斯かる事業が、弱年なる人によつて建てられたりとは、實に不可思議なり。我國人は其の當時何事も知らぬにもせよ、英國人然かも有名なるランキン教授が、かゝる弱年者を推選したるは其の理由如何、而して其の事業の成功したるを見れば、其の人選の謬ならざりしを知る。焉ぞ一の質問なくして可ならん、余は直に先生に其の由來を質したるに、先生は『弱年なるものが大なる事業を擔任するには、人に信ぜらるゝ所以のものなくてはならぬ』と云ひて思出したる如く、余の右手を見、其の後如何であります、君の右手は今や全癒しましたか、卒業の前に當り、君は實地演習に於て右手を傷け用ひ難きに至りしも少しも之に屈せずして、一切の卒業試問、卒業論文製圖を認め、見事なる卒業をせられたのは、是ぞ君が困難に打ち勝つこゝの出來るこゝを人に信ぜしめた試金石である。余のランキン氏に知られたのも亦た理由なく

てはならぬ事である』云はれ先生更に語を繼ぎて「君が琵琶湖疏水の大事業を落成させたのも、確か年齒三十に達せざる以前の事ではないか。余が弱年にして工部大學校を創立成功せしめたれば、さて何もそんなに驚くには及ばぬではないか」温なる笑を以つて余の顔を熱視し、暫く語を止められたるは、實に餘韻の更に深きを覺えたりき。

余は我が國に工部大學を設け、グイヤー先生等を聘するに至りたる徑路に就き、嘗つて親しく伊藤博文氏に聞き、少からず趣味を感じしもの即ち我が國側の消息は已に知るを得たり。雖も、外國側の消息は聞知せず、よつて徐ろに之を先生に訊せり。先生は例によりて笑を雙頬に漲らせつゝ「それは随分面白い事もある、話しても好い、此の六呎三吋の大兵は定めし日本人は當時余を老人と思ひしならん」一笑せられたり。(略)

先生の談話、いよゝ興に入りて時の移るを知らざりき。已にして夫、人來り茶を進めらるまゝに先生と共に再び食堂に入れば、長子シャーレス余を捉へて「私は貴方をグラスゴト大學に案内しやうと思つて待つて居るのです」云ふに、余も固より願ふ所なれば、さて先生へは再訪を期し、シャーレス氏に伴はれて戸外に出でぬ。

二、明治工業史編纂計畫成る

博士が恩師訪問の用件

博士の恩師訪問には、また博士としての重要な意味があつた。それは博士が積年の宿志たる明治工業史編纂の事業を恩師に諮つたことである。即ち博士は、我が國明治時代の工業が、如何にして發達し、如何にして進歩せしやに就き、其の資料の散佚せざるに先んじて、之を蒐集し、嚴正なる史的考察のもとに、整理を行ひ、次代の國民に遺すは、直接其の工業の進歩發達に参加せし博士自身の使命なることを確信するとともに、苟も歴史として之を編む以上は、ひとり我が國內一箇の見地より、其の進展の跡を攻究するに止めず、國外より觀察せるところのものをも參照せざるべからざる必要を感じ、博士はこゝに渡英を機として、恩師の意見を叩いたのであつた。

ダイヤー氏明治工業史の編纂を賛す

ダイヤー氏は博士の言を聴取して、痛く其の舉を賛した。之に加ふるに、忌憚なき自家の所見を以つて、また博士に勸告していふ。明治工業史の編纂事業たる、君が歸朝の後、當時其の事に與りし伊藤氏は云ふに及ばず、徳川前將軍にも其の計畫を告げて、資料の提供を求むるところあれど。

博士恩師の勸告に從ひ徳川

博士のダイヤー氏訪問は、啻に情誼上の満足のみならず、種々の點に於いて、博士に有益であつた。博士は、恩師の熱心なる協賛によつて、愈工業史編纂の志を鞏うし

前將軍
(慶喜)を
訪ふ

工學會で
組織後博
士は一切
の資料と
資金とを
提供す

た。歸朝後明治三十四年に其の勸告に従つて、博士は伊藤樞密院議長(博文)並びに徳川前將軍(慶喜)を訪ひ、維新前後の史實を訂し、なほ明治四十二年四月一日、著述に題する明治工業史なる揮毫を前將軍より得て、事業の完成に對する精神的刺戟を新にし、爾來十七年専門學研究の餘暇を、全部此の事業の遂行に盡し、殆んど獨力を以つて其の編纂に當つた。後、大正六年に到つて工學會に於いて其會の事業として明治工業史の編纂を行ふに決するに及んで、博士は自家の蒐集に係る材料を擧げて盡く之を提供し、なほ資金をも寄附して、之が完成に便じた。今日、博士が推薦をうけ、工學會に於ける明治工業史編纂委員長の位置に居るは、右の事情の然らしむるところである。而して此の事業は、年一年進捗し、最早や遠からず出版の運びに至りつゝあるが、此の事に就いては他の章に於いて別に叙述するであらう。

三 博士の西伯利鐵道調査結論

明治三十三年九月二十四日
歸朝

博士は、ダイヤー氏に會見して、後米國を経て其の年九月二十四日に横濱港に歸着した。最初の豫定は歸途もまた西伯利鐵道に據る筈であつたが、北清事變に際して露國政府は外人に一切西伯利の通過を許さなくなつた。それ故に博士は止む

東亞の政
局豫測し
難し

なく米國經由の航路を取つて歸朝したのである。

東亞の政局斯くの如く豫め測るべからず。若しそれ這回の西伯利鐵道調査事業にして、博士が之に着手するに少しく其の機を遅延せむ歟。我が帝國の運命に緊要密接の意味ある此の大計畫は、遂に畫餅に歸して、爲に國家は甚大の不利を招きたるなかりしやも保し難い。博士は其の著「西伯利鐵道」に序して曰く

余は昨年、學術研究のため、歐米諸國に渡航せんとし、途を西伯利に取れり。時適々、北支那變亂に際會し、故國の友人をして、余の安危を氣遣はしめたりしかぎ、余は東部西伯利を通過したりて、將に貝加爾湖を渡らんとする時、始めて變亂ありしことを知り得たるのみ。云々

又其の第一編の冒頭に曰く

余が此線路を視察せしは、明治三十三年春夏の間にありて、時恰も支那騷動の當時にありし。雖、電信は切斷せられて之を知るに由なく、六月二十一日、貝加爾湖を横ぎらんとするとき、始めて之を聞き得たる程なりき。越えて一日、即ち六月二十三日、露國出兵の勅令出でたり。若し、余が旅程今數週を後れたらんには、通行に幾多の時日を費し、或は危険なる出來事に遭遇したるやもはかり知る可らず。云々

と。斯くの如くにして、我が國の工學専門家の何人も未だ試みざりし、露人東漸の

博士の急
遂出發せ
しは皇國
のために
眞に天祐

大事業西伯利鐵道工事の實查が我が田邊博士によりて完全に遂行せらるゝを得しは、皇國の爲に、眞に天祐たるの感なきを得ない。最後に編者をして博士が明治三十三年此の大鐵道の實地調査の結論として與へたる數行の文字を掲出せしめよ。之を熟讀玩味することによつて尠くとも我が國民は、彼の日露戰爭が何故に明治三十七年二月を以つて起りたるかを知り得ると同時に、若し西伯利鐵道の複線工事にして竣成したる曉、開戦したりとせば我が國は如何なる打撃を蒙らざる可からざりし歟。蓋し回顧一番慄然として膚に粟するを覺ゆるであらう。

〔西伯利鐵道〕結論

之を要するに西伯利鐵道は既に述べたる如く、十年以前に着手し、其目的は主として西伯利殖民の便に供するに在るこゝ、露帝の勅語を讀みても、又其築造物の實際を見ても、歴々之を徵すべし。殖民鐵道は、其第一回工事は極めて簡畧を主とし、第二回工事に至り、之を改築するは一般の法則にして、此鐵道も亦之に則れり。又十年前には今日の如く東洋に對し多量の輸送力の必要あらざりし故に、其鐵道輸送力も甚だ微弱なりしか。今や年を逐うて東洋多事となり、其運送力の不足するを遺憾とするもの、如く頻に線路を改築しつゝあり、其千九百五年我が明治三十八年に、東清線と共に全通するの時に於ては、充分に平和の交通機關とし

て露國並に世界に便益を與ふるに少なからざるべし。

博士が著書に戰時輸送と云ふ字を殊に當時さけた譯は西行の歌を引用して當方より仕掛ける意のなきを示す必要があつたのである。